# 舞姫

森鷗外

石炭をばはや積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静かにて、熾熱灯の光の晴れがましきも徒なり。今宵は夜ごとにここに集ひ来る骨牌仲間もホテルに宿りて、舟に残れるは余一人のみなれば。五年前のことなりしが、平生の望み足りて、洋行の官命をかうむり、このセイゴンの港まで来し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新たならぬはなく、筆に任せて書き記しつる紀行文日ごとに幾千言をかなしけん、当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりて思へば、幼き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗などをさへ珍しげに記ししを、心ある人はいかにか見けん。こたびは途に上りし時、日記ものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のままなるは、独逸にて物学びせし間に、一種のニル・アドミラリイの気象をや養ひ得たりけん、あらず、これには別に故あり。

げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず、学問こそなほ心に飽き足らぬところも多かれ、浮き世のうきふしをも知りたり、人の心の頼み難きは言ふも更なり、我と我が心さへ変はりやすきをも悟り得たり。昨日の是は今日の非なる我が瞬間の感触を、筆に写して誰にか見せん。これや日記の成らぬ縁故なる、あらず、これには別に故あり。

嗚呼、ブリンヂイシイの港を出でてより、はや二十日あまりを経ぬ。世の常ならば生面の客にさへ交はりを結びて、旅の憂さを慰め合ふが航海の習ひなるに、微恙にことよせて房のうちにのみこもりて、同行の人々にも物言ふことの少なきは、人知らぬ恨みに頭のみ悩ましたればなり。この恨みは初め一抹の雲のごとく我が心をかすめて、瑞西の山色をも見せず、伊太利の古跡にも心をとどめさせず、中頃は世を厭ひ、身をはかなみて、腸日ごとに九回するともいふべき惨痛を我に負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一点の翳とのみなりたれど、文読むごとに、物見るごとに、鏡に映る影、声に応ずる響きのごとく、限りなき懐旧の情を呼び起こして、幾度となく我が心を苦しむ。嗚呼、いかにしてかこの恨みを銷せん。もしほかの恨みなりせば、詩に詠じ歌によめる後は心地すがすがしくもなりなん。これのみはあまりに深く我が心に彫りつけられたればさはあらじと思へど、今宵は辺りに人もなし、房奴の来て電気線の鍵をひねるにはなほどもあるべければ、いで、その概略を文に綴りてみん。

余は幼き頃より厳しき庭の訓へを受けしかひに、父をば早く喪ひつれど、学問の荒み衰ふることなく、旧藩の学館にありし日も、東京に出でて予備黌に通ひし時も、大学法学部に入りし後も、太田豊太郎といふ名はいつも一級の首に記されたりしに、一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳には学士の称を受けて、大学の立ちてよりその頃までにまたなき名誉なりと人にも言はれ、某省に出仕して、故郷なる母を都に呼び迎へ、楽しき年を送ること三年ばかり、官長の覚え殊なりしかば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、我が名を成さんも、我が家を興さんも、今ぞと思ふ心の勇み立ちて、五十を超えし母に別るるをもさまで悲しとは思はず、はるばると家を離れて伯林の都に来ぬ。

余は模糊たる功名の念と、検束に慣れたる勉強力とを持ちて、たちまちこの欧羅巴の新大都の中央に立てり。何らの光彩ぞ、我が目を射んとするは。何らの色沢ぞ、我が心を迷はさんとするは。菩提樹下と訳する時は、幽静なる境なるべく思はるれど、この大道髪のごときウンテル・デン・リンデンに来て両辺なる石畳の人道を行く隊々の士女を見よ。胸張り肩そびえたる士官の、まだ維廉一世の街に臨める窓に寄りたまふ頃なりければ、さまざまの色に飾りなしたる礼装をなしたる、顔よき少女の巴里まねびの粧ひしたる、かれもこれも目を驚かさぬはなきに、車道の土瀝青の上を音もせで走るいろいろの馬車、雲にそびゆる楼閣の少しとぎれたる所には、晴れたる空に夕立の音を聞かせてみなぎり落つる噴井の水、遠く望めばブランデンブルク門を隔てて緑樹枝をさし交はしたる中より、半天に浮かび出でたる凱旋塔の神女の像、このあまたの景物目睫の間に集まりたれば、初めてここに来し者の応接に暇なきもうべなり。されど我が胸にはたとひいかなる境に遊びても、あだなる美観に心をば動かさじの誓ひありて、常に我を襲ふ外物を遮りとどめたり

き。

余が鈴索を引き鳴らして謁を通じ、公の紹介状を出だして東来の意を告げし普魯西の官員は、皆快く余を迎へ、公使館よりの手続きだに事なく済みたらましかば、何事にもあれ、教へもし伝へもせむと約しき。喜ばしきは、我が故里にて、独逸、仏蘭西の語を学びしことなり。彼らは初めて余を見し時、いづくにていつの間にかくは学び得つると問はぬことなかりき。

さて官事の暇あるごとに、かねて公の許しをば得たりければ、ところの大学に入りて政治学を修めんと、名を簿冊に記させつ。

ひと月ふた月と過ぐすほどに、公の打ち合はせも済みて、取り調べも次第にはかどりゆけば、急ぐことをば報告書に作りて送り、さらぬをば写しとどめて、つひには幾巻をかなしけん。大学のかたにては、幼き心に思ひ計りしがごとく、政治家になるべき特科のあるべうもあらず、これかかれかと心迷ひながらも、二、三の法家の講筵に列なることに思ひ定めて、謝金を収め、行きて聴きつ。

かくて三年ばかりは夢のごとくにたちしが、時来れば包みても包み難きは人の好尚なるらん、余は父の遺言を守り、母の教へに従ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びし時より、官長のよき働き手を得たりと励ますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、ただ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当たりたればにや、心の中なにとなく穏やかならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表に現れて、昨日までの我ならぬ我を攻むるに似たり。余は我が身の今の世に雄飛すべき政治家になるにもよろしからず、また善く法典をそらんじて獄を断ずる法律家になるにもふさはしからざるを悟りたりと思ひぬ。余はひそかに思ふやう、我が母は余を活きたる辞書となさんとし、我が官長は余を活きたる法律となさんとやしけん。辞書たらんはなほ堪ふべけれど、法律たらんは忍ぶべからず。今までは瑣々たる問題にも、きはめて丁寧にいらへしつる余が、この頃より官長に寄する書にはしきりに法制の細目にかかづらふべきにあらぬを論じて、ひとたび法の精神をだに得たらんには、紛々たる万事は破竹のごとくなるべしなどと広言つ。また大学にては法科の講筵をよそにして、歴史文学に心を寄せ、やうやく蔗を嚼む境に入りぬ。

官長はもと心のままに用ゐるべき器械をこそ作らんとしけめ。独立の思想を懐きて、人並みならぬ面持ちしたる男をいかでか喜ぶべき。危ふきは余が当時の地位なりけり。されどこれのみにては、なほ我が地位を覆すに足らざりけんを、日頃伯林の留学生の中にて、ある勢力あるひと群れと余との間に、おもしろからぬ関係ありて、かの人々は余を猜疑し、またつひに余を讒誣するに至りぬ。されどこれとてもその故なくてやは。

かの人々は余がともに麦酒の杯をも挙げず、球突きの棒をも取らぬを、かたくななる心と欲を制する力とに帰して、かつは嘲りかつは嫉みたりけん。されどこは余を知らねばなり。嗚呼、この故よしは、我が身だに知らざりしを、いかでか人に知らるべき。我が心はかの合歓といふ木の葉に似て、物触れば縮みて避けんとす。我が心は処女に似たり。余が幼き頃より長者の教へを守りて、学びの道をたどりしも、仕への道を歩みしも、みな勇気ありてよくしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、みな自ら欺き、人をさへ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、ただ一筋にたどりしのみ。よそに心の乱れざりしは、外物を棄てて顧みぬほどの勇気ありしにあらず、ただ外物に恐れて自ら我が手足を縛せしのみ。故郷を立ち出づる前にも、我が有為の人物なることを疑はず、また我が心のよく耐へんことをも深く信じたりき。嗚呼、かれも一時。舟の横浜を離るるまでは、あつぱれ豪傑と思ひし身も、せきあへぬ涙に手巾を濡らしつるを我ながら怪しと思ひしが、これぞなかなかに我が本性なりける。この心は生まれながらにやありけん、また早く父を失ひて母の手に育てられしによりてや生じけん。

かの人々の嘲るはさることなり。されど嫉むは愚かならずや。この弱くふびんなる心を。

赤く白く面を塗りて、赫然たる色の衣をまとひ、珈琲店に座して客を引く女を見ては、行きてこれに就かん勇気なく、高き帽を戴き、眼鏡に鼻を挟ませて、普魯西にては貴族めきたる鼻音にて物言ふレエベマンを見ては、行きてこれと遊

ばん勇気なし。これらの勇気なければ、かの活発なる同郷の人々と交はらんやうもなし。この交際の疎きがために、かの人々はただ余を嘲り、余を嫉むのみならで、また余を猜疑することとなりぬ。これぞ余が冤罪を身に負ひて、暫時の間に無量の艱難を閲し尽くす媒なりける。

ある日の夕暮れなりしが、余は獣苑を漫歩して、ウンテル・デン・リンデンを過ぎ、我がモンビシユウ街の僑居に帰らんと、クロステル巷の古寺の前に来ぬ。余はかの灯火の海を渡り来て、この狭く薄暗き巷に入り、楼上の木欄に干したる敷布、襦袢などまだ取り入れぬ人家、頰髭長き猶太教徒の翁が戸前にたたずみたる居酒屋、一つの梯は直ちに楼に達し、他の梯は穴蔵住まひの鍛冶が家に通じたる貸家などに向かひて、凹字の形に引き込みて立てられたる、この三百年前の遺跡を望むごとに、心の恍惚となりてしばしたたずみしこと幾度なるを知らず。

今この所を過ぎんとする時、閉ざしたる寺門の扉に寄りて、声をのみつつ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六、七なるべし。被りし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我が足音に驚かされて顧みたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この青く清らにて物問ひたげに愁ひを含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に覆はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我が心の底までは徹したるか。

彼ははからぬ深き嘆きに遭ひて、前後を顧みる暇なく、ここに立ちて泣くにや。我が臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて、余は覚えずそばに寄り、「何故に泣きたまふか。ところに係累なき外人は、かへりて力を貸しやすきこともあらん。」と言ひかけたるが、我ながら我が大胆なるにあきれたり。

彼は驚きて我が黄なる面をうち守りしが、我が真率なる心や色に現れたりけん。「君は善き人なりと見ゆ。彼のごとく酷くはあらじ。また我が母のごとく。」しばし涸れたる涙の泉はまたあふれて愛らしき頰を流れ落つ。

「我を救ひたまへ、君。我が恥なき人とならんを。母は我が彼の言葉に従はねばとて、我を打ちき。父は死にたり。明日は葬らではかなはぬに、家に一銭の貯へだになし。」

あとは欷歔の声のみ。我が眼はこのうつむきたる少女のふうなじにのみ注がれたり。

「君が家に送り行かんに、まづ心を鎮めたまへ。声をな人に聞かせたまひそ。ここは往来なるに。」彼は物語りするうちに、覚えず我が肩に寄りしが、この時ふと頭をもたげ、また初めて我を見たるがごとく、恥ぢて我がそばを飛びのきつ。

人の見るが厭はしさに、早足に行く少女のあとにつきて、寺の筋向かひなる大戸を入れば、欠け損じたる石の梯あり。これを上りて、四階目に腰を折りて潜るべきほどの戸あり。少女はさびたる針金の先をねぢ曲げたるに、手を掛けて強く引きしに、中には咳枯れたる老媼の声して、「誰ぞ」と問ふ。エリス帰りぬと答ふる間もなく、戸をあららかに引き開けしは、半ば白みたる髪、悪しき相にはあらねど、貧苦の痕を額に印せし面の老媼にて、古き獣綿の衣を着、汚れたる上靴を履きたり。エリスの余に会釈して入るを、彼は待ち兼ねしごとく、戸を激しくたて切りつ。

余はしばし茫然として立ちたりしが、ふと油灯の光に透かして戸を見れば、エルンスト・ワイゲルトと漆もて書き、下に仕立物師と注したり。これ過ぎぬといふ少女が父の名なるべし。内には言ひ争ふごとき声聞こえしが、また静かになりて戸は再び開きぬ。先の老媼は慇懃におのが無礼の振る舞ひせしを詫びて、余を迎へ入れつ。戸の内は廚にて、右手の低き窓に、真白に洗ひたる麻布を懸けたり。左手には粗末に積み上げたる煉瓦の竈あり。正面の一室の戸は半ば開きたるが、内には白布を覆へる臥床あり。伏したるは亡き人なるべし。竈のそばなる戸を開きて余を導きつ。この所はいはゆるマンサルドの街に面したる一間なれば、天井もなし。隅の屋根裏より窓に向かひて斜めに下がれる梁を、紙にて張りたる下の、立たば頭のつかふべき所に臥床あり。中央なる机には美しき氈を掛けて、上には書物一、二巻と写真帳とを並べ、陶瓶にはここに似合はしからぬ価高き花束を生けたり。そが傍らに少女は羞を帯びて立てり。

彼は優れて美なり。乳のごとき色の顔は灯火に映じて微紅を潮したり。手足の繊くたをやかなるは、貧家の女に似ず。老媼の室を出でし後にて、少女は少し訛りたる言葉にて言ふ。「許したまへ。君をここまで導きし心なさを。君は善き人なるべし。我をばよも憎みたまはじ。明日に迫るは父の葬り、頼みに思ひしシヤウムベルヒ、君は彼を知らでやおは

さん。彼はヴイクトリア座の座頭なり。彼が抱へとなりしより、はや二年なれば、事なく我らを助けんと思ひしに、人の憂ひに付け込みて、身勝手なる言ひ掛けせんとは。我を救ひたまへ、君。金をば薄き給金を割きて返し参らせん。よしや我が身は食らはずとも。それもならずば母の言葉に。」彼は涙ぐみて身を震はせたり。その見上げたる目には、人に否とは言はせぬ媚態あり。この目の働きは知りてするにや、また自らは知らぬにや。

我が隠しには二、三マルクの銀貨あれど、それにて足るべくもあらねば、余は時計をはづして机の上に置きぬ。「これにて一時の急をしのぎたまへ。質屋の使ひのモンビシユウ街三番地にて太田と尋ね来ん折には価を取らすべきに。」

少女は驚き感ぜしさま見えて、余が別れのために出だしたる手を唇に当てたるが、はらはらと落つる熱き涙を我が手の背に注ぎつ。

嗚呼、なんらの悪因ぞ。この恩を謝せんとて、自ら我が僑居に来し少女は、シヨオペンハウエルを右にし、シルレルを左にして、終日兀座する我が読書の窓下に、一輪の名花を咲かせてけり。この時を初めとして、余と少女との交はりやうやく繁くなりもてゆきて、同郷人にさへ知られぬればし、彼らは速了にも、余をもて色を舞姫の群れに漁するものとしたり。我ら二人の間にはまだ痴騃なる歓楽のみ存じたりしを。

その名を指さんははばかりあれど、同郷人の中に事を好む人ありて、余がしばしば芝居に出入りして、女優と交はるといふことを、官長のもとに報じつ。さらぬだに余がすこぶる学問の岐路に走るを知りて憎み思ひし官長は、つひに旨を公使館に伝へて、我が官を免じ、我が職を解いたり。公使がこの命を伝ふる時余に言ひしは、御身もし即時に郷に帰らば、路用を給すべけれど、もしなほここに在らんには、公の助けをば仰ぐべからずとのことなりき。余は一週日の猶予を請ひて、とやかうと思ひ煩ふうち、我が生涯にて最も悲痛を覚えさせたる二通の書状に接しぬ。この二通はほとんど同時に出だししものなれど、一は母の自筆、一は親族なる某が、母の死を、我がまたなく慕ふ母の死を報じたる書なりき。余は母の書中の言をここに反覆するに堪へず、涙の迫り来て筆の運びを妨ぐればなり。

余とエリスとの交際は、この時まではよそ目に見るより清白なりき。彼は父の貧しきがために、充分なる教育を受けず、十五の時舞の師の募りに応じて、この恥づかしき業を教へられ、クルズス果てて後、ヴイクトリア座に出でて、今は場中第二の地位を占めたり。されど詩人ハツクレンデルが当世の奴隷と言ひしごとく、はかなきは舞姫の身の上なり。薄き給金にてつながれ、昼の温習、夜の舞台と厳しく使はれ、芝居の化粧部屋に入りてこそ紅粉をも粧ひ、美しき衣をもまとへ、場外にてはひとり身の衣食も足らずがちなれば、親はらからを養ふ者はその辛苦いかにぞや。されば彼らの仲間にて、賤しき限りなる業に堕ちぬはまれなりとぞ言ふなる。エリスがこれを逃れしは、おとなしき性質と、剛気ある父の守護とによりてなり。彼は幼き時よりもの読むことをばさすがに好みしかど、手に入るは卑しきコルポルタアジユと唱ふる貸本屋の小説のみなりしを、余と相知る頃より、余が貸しつる書を読み習ひて、やうやく趣味をも知り、言葉の訛りをも正し、幾ほどもなく余に寄する書にも誤字少なくなりぬ。かかれば余ら二人の間にはまづ師弟の交はりを生じたるなりき。我が不時の免官を聞きし時に、彼は色を失ひつ。余は彼が身の事に関はりしを包み隠しぬれど、彼は余に向かひて母にはこれを秘めたまへと言ひぬ。こは母の余が学資を失ひしを知りて余を疎んぜんを恐れてなり。

嗚呼、詳しくここに写さんも要なけれど、余が彼を愛づる心のにはかに強くなりて、つひに離れ難き仲となりしはこの折なりき。我が一身の大事は前に横たはりて、まことに危急存亡の秋なるに、この行ひありしを怪しみ、また誹る人もあるべけれど、余がエリスを愛する情は、初めて相見し時より浅くはあらぬに、今我が数奇を憐れみ、また別離を悲しみて伏し沈みたる面に、鬢の毛の解けてかかりたる、その美しき、いぢらしき姿は、余が悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる脳髄を射て、恍惚の間にここに及びしをいかにせん。

公使に約せし日も近づき、我が命は迫りぬ。このままにて郷に帰らば、学成らずして汚名を負ひたる身の浮かぶ瀬あらじ。さればとてとどまらんには、学資を得べき手だてなし。

この時余を助けしは今我が同行の一人なる相沢謙吉なり。彼は東京に在りて、既に天方伯の秘書官たりしが、余が免官の官報に出でしを見て、某新聞紙の編集長に説きて、余を社の通信員となし、伯林にとどまりて政治学芸のことなど

を報道せしむることとなしつ。

社の報酬は言ふに足らぬほどなれど、棲家をも移し、午餐に行く食店をも変へたらんには、かすかなる暮らしは立つべし。とかう思案するほどに、心の誠を顕して、助けの綱を我に投げ掛けしはエリスなりき。彼はいかに母を説き動かしけん、余は彼ら親子の家に寄寓することとなり、エリスとは余とはいっよりとはなしに、有るか無きかの収入を合はせて、憂きが中にも楽しき月日を送りぬ。

朝の珈琲果つれば、彼は温習に行き、さらぬ日には家にとどまりて、余はキヨオニヒ街の間口狭く奥行きのみいと長き休息所に赴き、あらゆる新聞を読み、鉛筆取り出でてかれこれと材料を集む。この截り開きたる引き窓より光を取れる室にて、定まりたる業なき若人、多くもあらぬ金を人に貸して己は遊び暮らす老人、取引所の業の暇を盗みて足を休むる商人などと臂を並べ、冷ややかなる石卓の上にて、忙はしげに筆を走らせ、小女が持て来る一杯の珈琲の冷むるをも顧みず、空きたる新聞の細長き板ぎれに挟みたるを、幾種となく掛け連ねたるかたへの壁に、幾度となく往来する日本人を、知らぬ人は何とか見けん。また一時近くなるほどに、温習に行きたる日には帰り路によぎりて、余とともに店を立ち出づるこの常ならず軽き、掌上の舞をもなし得つべき少女を、怪しみ見送る人もありしなるべし。

我が学問は荒みぬ。屋根裏の一灯かすかに燃えて、エリスが劇場より帰りて、椅子に寄りて縫ひ物などするそばの机にて、余は新聞の原稿を書けり。昔の法令条目の枯れ葉を紙上にかき寄せしとは殊にて、今は活発々たる政界の運動、文学美術にかかはる新現象の批評など、かれこれと結び合はせて、力の及ばん限り、ビヨルネよりはむしろハイネを学びて思ひを構へ、さまざまの文を作りしうちにも、引き続きて維廉一世と仏得力三世との崩殂ありて、新帝の即位、ビスマルク侯の進退如何などのことにつきては、ことさらにつまびらかなる報告をなしき。さればこの頃よりは思ひしよりも忙はしくして、多くもあらぬ蔵書をひもとき、旧業を尋ぬることも難く、大学の籍はまだ削られねど、謝金を収むることの難ければ、ただ一つにしたる講筵だに行きて聴くことはまれなりき。

我が学問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じき。そをいかにといふに、およそ民間学の流布したることは、欧州諸国の間にて独逸に若くはなからん。幾百種の新聞雑誌に散見する議論にはすこぶる高尚なるも多きを、余は通信員となりし日より、かつて大学に繁く通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔もて、読みてはまた読み、写してはまた写すほどに、今まで一筋の道をのみ走りし知識は、おのづから総括的になりて、同郷の留学生などのおほかたは、夢にも知らぬ境地に至りぬ。彼らの仲間には独逸新聞の社説をだによくはえ読まぬがあるに。

明治二十一年の冬は来にけり。表街の人道にてこそ砂をも蒔け、鍤をも揮へ、クロステル街のあたりは凸凹坎坷の所は見ゆめれど、表のみは一面に凍りて、朝に戸を開けば飢ゑ凍えし雀の落ちて死にたるも哀れなり。室を温め、竈に火を焚きつけても、壁の石を徹し、衣の綿をうがつ北欧羅巴の寒さは、なかなかに堪へ難かり。エリスは二、三日前の夜、舞台にて卒倒しつとて、人に助けられて帰り来しが、それより心地悪しとて休み、物食ふごとに吐くを、悪阻といふものならんと初めて心づきしは母なりき。嗚呼、さらぬだにおぼつかなきは我が身の行く末なるに、もし真なりせばいかにせまし。

今朝は日曜なれば家に在れど、心は楽しからず。エリスは床に臥すほどにはあらねど、小さき鉄炉のほとりに椅子さし寄せて言葉少なし。この時戸口に人の声して、ほどなく庖厨にありしエリスが母は、郵便の書状を持て来て余に渡しつ。見れば見覚えある相沢が手なるに、郵便切手は普魯西のものにて、消印には伯林とあり。いぶかりつつも開きて読めば、とみのことにてあらかじめ知らするに由なかりしが、昨夜ここに着せられし天方大臣に付きて我も来たり。伯の汝を見まほしとのたまふに疾く来よ。汝が名誉を回復するもこの時にあるべきぞ。心のみ急がれて用事をのみ言ひやるとなり。読み終はりて茫然たる面持ちを見て、エリス言ふ。「故郷よりの文なりや。悪しき便りにてはよも。」彼は例の新聞社の報酬に関する書状と思ひしならん。「否、心になる掛けそ。御身も名を知る相沢が、大臣とともにここに来て我を呼ぶなり。急ぐと言へば今よりこそ。」

かはゆき独り子を出だしやる母もかくは心を用ゐじ。大臣にまみえもやせんと思へばならん、エリスは病をつとめて

起ち、上襦袢もきはめて白きを選び、丁寧にしまひ置きしゲエロツクといふ二列ぼたんの服を出だして着せ、襟飾りさへ余がために手づから結びつ。

「これにて見苦しとは誰もえ言はじ。我が鏡に向きて見たまへ。何故にかく不興なる面持ちを見せたまふか。我ももろともに行かまほしきを。」少し容をあらためて。「否、かく衣をあらためたまふを見れば、何となく我が豊太郎の君とは見えず。」また少し考へて。「よしや富貴になりたまふ日はありとも、我をば見棄てたまはじ。我が病は母ののたまふごとくならずとも。」

「何、富貴。」余は微笑しつ。「政治社会などに出でんの望みは絶ちしより幾年をか経ぬるを。大臣は見たくもなし。ただ年久しく別れたりし友にこそ逢ひには行け。」エリスが母の呼びし一等ドロシユケは、輪下にきしる雪道を窓の下まで来ぬ。余は手袋をはめ、少し汚れたる外套を背に被ひて手をば通さず帽を取りてエリスに接吻して楼を下りつ。彼は凍れる窓を明け、乱れし髪を朔風に吹かせて余が乗りし車を見送りぬ。

余が車を下りしはカイゼルホオフの入り口なり。門者に秘書官相沢が室の番号を問ひて、久しく踏み慣れぬ大理石の階を上り、中央の柱にプリユツシユを被へるゾフアを据ゑつけ、正面には鏡を立てたる前房に入りぬ。外套をばここにて脱ぎ、廊を伝ひて室の前まで行きしが、余は少し踟躕したり。同じく大学に在りし日に、余が品行の方正なるを激賞したる相沢が、今日はいかなる面持ちして出で迎ふらん。室に入りて相対して見れば、形こそもとに比ぶれば肥えてたくましくなりたれ、依然たる快活の気象、我が失行をもさまで意に介せざりきと見ゆ。別後の情を細叙するにも暇あらず、引かれて大臣に謁し、委託せられしは独逸語にて記せる文書の急を要するを翻訳せよとのことなり。余が文書を受領して大臣の室を出でし時、相沢は後より来て余と午餐を共にせんと言ひぬ。

食卓にては彼多く問ひて、我多く答へき。彼が生路はおほむね平滑なりしに、轗軻数奇なるは我が身の上なりければなり。

余が胸臆を開いて物語りし不幸なる閲歴を聞きて、彼はしばしば驚きしが、なかなかに余を譴めんとはせず、かへりて他の凡庸なる諸生輩を罵りき。されど物語の終はりし時、彼は色を正して諫むるやう、この一段のことはもと生まれながらなる弱き心より出でしなれば、今さらに言はんもかひなし。とはいへ、学識あり、才能ある者が、いつまでか一少女の情にかかづらひて、目的なき生活をなすべき。今は天方伯もただ独逸語を利用せんの心のみなり。己もまた伯が当時の免官の理由を知れるが故に、強ひてその成心を動かさんとはせず、伯が心中にて曲庇者なりなんど思はれんは、朋友に利なく、己に損あればなり。人を薦むるはまづその能を示すに若かず。これを示して伯の信用を求めよ。またかの少女との関係は、よしや彼に誠ありとも、よしや情交は深くなりぬとも、人材を知りての恋にあらず、慣習といふ一種の惰性より生じたる交はりなり。意を決して断てと。これその言のおほむねなりき。

大洋に舵を失ひし舟人が、はるかなる山を望むごときは、相沢が余に示したる前途の方針なり。されどこの山はなほ重霧の間に在りて、いつ行き着かんも、否、果たして行き着きぬとも、我が中心に満足を与へんも定かならず。貧しきが中にも楽しきは今の生活、棄て難きはエリスが愛。我が弱き心には思ひ定めん由なかりしが、しばらく友の言に従ひて、この情縁を断たんと約しき。余は守るところを失はじと思ひて、己に敵する者には抗抵すれども、友に対して否とはえ答へぬが常なり。

別れて出づれば風面を打てり。二重の玻璃窓を厳しく閉ざして、大いなる陶炉に火を焚きたるホテルの食堂を出でしなれば、薄き外套を透る午後四時の寒さはことさらに堪へ難く、膚粟立つとともに、余は心の中に一種の寒さを覚えき。

翻訳は一夜になし果てつ。カイゼルホオフへ通ふことはこれよりやうやく繁くなりもてゆくほどに、初めは伯の言葉も用事のみなりしが、後には近頃故郷にてありしことなどを挙げて余が意見を問ひ、折に触れては道中にて人々の失錯ありしことどもを告げてうち笑ひたまひき。

ひと月ばかり過ぎて、ある日伯は突然我に向かひて、「余は明旦、魯西亜に向かひて出発すべし。随ひて来べきか。」と問ふ。余は数日間、かの公務に暇なき相沢を見ざりしかば、この問ひは不意に余を驚かしつ。「いかで命に従

はざらむ。」余は我が恥を表さん。この答へはいち早く決断して言ひしにあらず。余は己が信じて頼む心を生じたる人に、卒然ものを問はれたる時は、咄嗟の間、その答への範囲をよくも量らず、直ちにうべなふことあり。さてうべなひし上にて、そのなし難きに心づきても、強ひて当時の心虚ろなりしを覆ひ隠し、耐忍してこれを実行することしばしばなり。

この日は翻訳の代に、旅費さへ添へて賜りしを持て帰りて、翻訳の代をばエリスに預けつ。これにて魯西亜より帰り来んまでの費えをば支へつべし。彼は医者に見せしに常ならぬ身なりといふ。貧血の性なりし故、幾月か心づかでありけん。座頭よりは休むことのあまりに久しければ籍を除きぬと言ひおこせつ。まだ一月ばかりなるに、かく厳しきは故あればなるべし。旅立ちのことにはいたく心を悩ますとも見えず。偽りなき我が心を厚く信じたれば。

鉄路にては遠くもあらぬ旅なれば、用意とてもなし。身に合はせて借りたる黒き礼服、新たに買ひ求めたるゴタ板の魯廷の貴族譜、二、三種の辞書などを、小カバンに入れたるのみ。さすがに心細きことのみ多きこのほどなれば、出で行く後に残らんも物憂かるべく、また停車場にて涙こぼしなどしたらんには後ろめたかるべければとて、翌朝早くエリスをば母につけて知る人がり出だしやりつ。余は旅装整へて戸を閉ざし、鍵をば入り口に住む靴屋の主人に預けて出でぬ。

魯国行きにつきては、何事をか叙すべき。我が舌人たる任務はたちまちに余を拉し去りて、青雲の上に堕としたり。余が大臣の一行に随ひて、ペエテルブルクに在りし間に余を囲繞せしは、巴里絶頂の驕奢を、氷雪のうちに移したる王城の粧飾、ことさらに黄燭の燭を幾つともなく点したるに、幾星の勲章、幾枝のエポレットが映射する光、彫鏤の工を尽くしたるカミンの火に寒さを忘れて使ふ宮女の扇の閃きなどにて、この間仏蘭西語を最も円滑に使ふ者は我なるが故に、賓主の間に周旋して事を弁ずる者もまた多くは余なりき。

この間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日ごとに書を寄せしかばえ忘れざりき。余が立ちし日には、いつになく独りにて灯火に向かはんことの心憂さに、知る人のもとにて夜に入るまで物語りし、疲るるを待ちて家に帰り、直ちに寝ねつ。次の朝目覚めし時は、なほ独り後に残りしことを夢にはあらずやと思ひぬ。起き出でし時の心細さ、かかる思ひをば、生計に苦しみて、今日の日の食なかりし折にもせざりき。これ彼が第一の書のあらましなり。

またほど経ての書はすこぶる思ひ迫りて書きたるごとくなりき。文をば否といふ字にて起こしたり。否、君を思ふ心の深き底をば今ぞ知りぬる。君は故里に頼もしき族なしとのたまへば、この地に善き世渡りの生計あらば、とどまりたまはぬことやはある。また我が愛もてつなぎとめではやまじ。それもかなはで東に還りたまはんとならば、親とともに行かんはやすけれど、かほどに多き路用を何処よりか得ん。いかなる業をなしてもこの地にとどまりて、君が世に出でたまはん日をこそ待ためと常には思ひしが、しばしの旅とて立ち出でたまひしよりこの二十日ばかり、別離の思ひは日にけに茂りゆくのみ。袂を分かつはただ一瞬の苦艱なりと思ひしは迷ひなりけり。我が身の常ならぬがやうやくにしるくなれる、それさへあるに、よしやいかなることありとも、我をばゆめな棄てたまひそ。母とはいたく争ひぬ。されど我が身の過ぎし頃には似で思ひ定めたるを見て心折れぬ。我が東に行かん日には、ステツチンわたりの農家に、遠き縁者あるに、身を寄せんとぞ言ふなる。書き送りたまひしごとく、大臣の君に重く用ゐられたまはば、我が路用の金はともかくもなりなん。今はひたすら君が伯林に帰りたまはん日を待つのみ。

嗚呼、余はこの書を見て初めて我が地位を明視し得たり。恥づかしきは我が鈍き心なり。余は我が身一つの進退につきても、また我が身にかかはらぬ他人のことにつきても、決断ありと自ら心に誇りしが、この決断は順境にのみありて、逆境にはあらず。我と人との関係を照らさんとする時は、頼みし胸中の鏡は曇りたり。

大臣は既に我に厚し。されど我が近眼はただ己が尽くした職分をのみ見き。余はこれに未来の望みをつなぐことには、神も知るらむ、絶えて思ひ至らざりき。されど今ここに心づきて、我が心はなほ冷然たりしか。先に友の勧めし時は、大臣の信用は屋上の禽のごとくなりしが、今はややこれを得たるかと思はるるに、相沢がこの頃の言葉の端に、本国に帰りて後もともにかくてあらば云々と言ひしは、大臣のかくのたまひしを、友ながらも公事なれば明らかには告げ

ざりしか。今さら思へば、余が軽率にも彼に向かひてエリスとの関係を絶たんと言ひしを、早く大臣に告げやしけん。

嗚呼、独逸に来し初めに、自ら我が本領を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥のしばし羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の糸は解くに由なし。先にこれを操りしは、我が某省の官長にて、今はこの糸、あなあはれ、天方伯の手中に在り。余が大臣の一行とともに伯林に帰りしは、あたかもこれ新年の旦なりき。停車場に別れを告げて、我が家を指して車を駆りつ。ここにては今も除夜に眠らず、元旦に眠るが習ひなれば、万戸寂然たり。寒さは強く、路上の雪は稜角ある氷片となりて、晴れたる日に映じ、きらきらと輝けり。車はクロステル街に曲がりて、家の入り口に駐まりぬ。この時窓を開く音せしが、車よりは見えず。馭丁にカバン持たせて梯を上らんとするほどに、エリスの梯を駆け下るに逢ひぬ。彼が一声叫びて我が頸を抱きしを見て馭丁はあきれたる面持ちにて、何やらむ髭の内にて言ひしが聞こえず。

「よくぞ帰り来たまひし。帰り来たまはずば我が命は絶えなんを。」

我が心はこの時までも定まらず、故郷を憶ふ念と栄達を求むる心とは、時として愛情を圧せんとせしが、ただこの一刹那、低徊踟躕の思ひは去りて、余は彼を抱き、彼の頭は我が肩に寄りて、彼が喜びの涙ははらはらと肩の上に落ちぬ。

「幾階か持ちて行くべき。」と鑼のごとく叫びし馭丁は、いち早く上りて梯の上に立てり。

戸の外に出迎へしエリスが母に、馭丁をねぎらひたまへと銀貨を渡して、余は手を取りて引くエリスに伴はれ、急ぎて室に入りぬ。一瞥して余は驚きぬ、机の上には白き木綿、白きレエスなどをうづたかく積み上げたれば。

エリスは打ち笑みつつこれを指して、「何とか見たまふ、この心がまへを。」と言ひつつ一つの木綿ぎれを取り上ぐるを見れば襁褓なりき。「我が心の楽しさを思ひたまへ。産まれん子は君に似て黒き瞳をや持ちたらん。この瞳。嗚呼、夢にのみ見しは君が黒き瞳なり。産まれたらん日には君が正しき心にて、よもあだし名をば名のらせたまはじ。」彼は頭を垂れたり。「幼しと笑ひたまはんが、寺に入らん日はいかに嬉しからまし。」見上げたる目には涙満ちたり。

二、三日の間は大臣をも、旅の疲れやおはさんとてあへて訪らはず、家にのみこもりをりしが、ある日の夕暮れ使ひして招かれぬ。行きて見れば待遇殊にめでたく、魯西亜行きの労を問ひ慰めて後、我とともに東に帰る心なきか、君が学問こそ我が測り知るところならね、語学のみにて世の用には足りなん、滞留の余りに久しければ、さまざまの係累もやあらんと、相沢に問ひしに、さることなしと聞きて落ち居たりとのたまふ。その気色辞むべくもあらず。あなやと思ひしが、さすがに相沢の言を偽りなりとも言ひ難きに、もしこの手にしもすがらずば、本国をも失ひ、名誉をひきかへさん道をも絶ち、身はこの広漠たる欧州大都の人の海に葬られんかと思ふ念、心頭を衝いて起これり。嗚呼、なんらの特操なき心ぞ、「承りはべり」と応へたるは。

黒がねの額はありとも、帰りてエリスに何とか言はん。ホテルを出でし時の我が心の錯乱は、たとへんに物なかりき。余は道の東西をも分かず、思ひに沈みて行くほどに、行き合ふ馬車の馭丁に幾度か叱せられ、驚きて飛びのきつ。しばらくしてふとあたりを見れば、獣苑の傍らに出でたり。倒るごとくに路の辺の榻に寄りて、灼くがごとく熱し、椎にて打たるるごとく響く頭を榻背にもたせ、死したるごときさまにて幾時をか過ごしけん。激しき寒さ骨に徹すと覚えて醒めし時は、夜に入りて雪はしげく降り、帽の庇、外套の肩に一寸ばかりも積もりたりき。

もはや十一時をや過ぎけん、モハビツト、カルル街通ひの鉄道馬車の軌道も雪に埋もれ、ブランデンブルク門のほとりの瓦斯灯は寂しき光を放ちたり。立ち上がらんとするに足の凍えたれば、両手にてさすりて、やうやく歩み得るほどにはなりぬ。

足の運びのはかどらねば、クロステル街まで来し時は、半夜をや過ぎたりけん。ここまで来し道をばいかに歩みしか知らず。一月上旬の夜なれば、ウンテル・デン・リンデンの酒家、茶店なほ人の出入り盛りにて賑はしかりしならめど、ふつに覚えず。我が脳中にはただただ我は許すべからぬ罪人なりと思ふ心のみ満ち満ちたりき。

四階の屋根裏には、エリスはまだ寝ねずとおぼしく、炯然たる一星の火、暗き空にすかせば、明らかに見ゆるが、降りしきる鷺のごとき雪片に、たちまち覆はれ、たちまちまた現れて、風に弄ばるるに似たり。戸口に入りしより疲れを

覚えて、身の節の痛み堪へ難ければ、這ふごとくに梯を上りつ。庖廚を過ぎ、室の戸を開きて入りしに、机に寄りて襁褓縫ひたりしエリスは振り返りて、「あ」と叫びぬ。「いかにかしたまひし。御身の姿は。」

驚きしもうべなりけり、蒼然として死人に等しき我が面色、帽をばいつの間にか失ひ、髪おどろと乱れて、幾度か道にてつまづき倒れしことなれば、衣は泥まじりの雪に汚れ、とところどころは裂けたれば。

余は答へんとすれど声出でず、膝のしきりにをののかれて立つに堪へねば、椅子をつかまんとせしまでは覚えしが、そのままに地に倒れぬ。

人事を知るほどになりしは数週の後なりき。熱激しくて譫語のみ言ひしを、エリスが懇ろにみとるほどに、ある日相沢は尋ね来て、余が彼に隠したる顚末をつばらに知りて、大臣には病のことのみ告げ、よきやうに繕ひおきしなり。余は初めて病床に侍するエリスを見て、その変はりたる姿に驚きぬ。彼はこの数週のうちにいたく痩せて、血走りし目はくぼみ、灰色の頬は落ちたり。相沢の助けにて日々の生計には窮せざりしが、この恩人は彼を精神的に殺ししなり。

後に聞けば彼は相沢に逢ひし時、余が相沢に与へし約束を聞き、またかの夕大臣に聞こえ上げし一諾を知り、にはかに座より躍り上がり、面色さながら土のごとく、「我が豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺きたまひしか」と叫び、その場に倒れぬ。相沢は母を呼びてともに助けて床に臥させしに、しばらくして醒めし時は、目は直視したるままにて傍らの人をも見知らず、我が名を呼びていたく罵り、髪をむしり、布団を嚙みなどし、またにはかに心づきたるさまにて物を探り求めたり。母の取りて与ふる物をばことごとく抛ちしが、机の上なりし襁褓を与へたる時、探りみて顔に押しあて、涙を流して泣きぬ。

これよりは騒ぐことはなけれど、精神の作用はほとんど全く廃して、その痴なること赤児のごとくなり。医に見せしに、過劇なる心労にて急に起こりしパラノイアといふ病なれば、治癒の見込みなしと言ふ。ダルドルフ癲狂院に入れんとせしに、泣き叫びて聴かず、後にはかの襁褓一つを身につけて、幾度か出だしては見、見ては欷歔す。余が病床をば離れねど、これさへ心ありてにはあらずと見ゆ。ただ折々思ひ出だしたるやうに「薬を、薬を」と言ふのみ。

余が病は全く癒えぬ。エリスが生ける屍を抱きて千行の涙を注ぎしは幾度ぞ。大臣に随ひて帰東の途に上りし時は、相沢と議りてエリスが母にかすかなる生計を営むに足るほどの資本を与へ、あはれなる狂女の胎内に遺しし子の生まれむ折のことをも頼みおきぬ。

嗚呼、相沢謙吉がごとき良友は世にまた得がたかるべし。されど我が脳裡に一点の彼を憎む心今日までも残れりけり。

（出典『鷗外全集　第一巻』一九七一年）